コメニウスとツヴィッカー
その１　ツヴィッカーの経歴

高　橋　康　造*

Comenius and Zwicker　I. Zwicker and his Career

Kozo TAKAHASHI*

Abstract

Daniel Zwicker published his polemical paper, "Irenicum irenicorum" in 1658. Comenius immediately reacted to Zwicker's ideas, esp. to his antitrinitarian theory. The controvercy between them lasted for five years. Comenius spent much of his time in criticizing Zwicker, without accomplishing his promise to finish his '*Consultatio*.' In spite of the fact that he censured Zwicker's socinianism and socinianism itself, Comenius had had relationships with such socinians as Ruar, Wolzogen. The sudden change of his mind is an 'enigma,' as it were. We should take this problem, not easy to be solved, into account in the next articles of my own.

Keywords : Comenius, Zwicker, Theology, Socinianism

序

1983年にシャーデル（Schadel, Erwin）が編纂したコメニウスの選集（Ausgewählte Werke），第4巻が出版された[1]。この巻はソッツィーニ派に対する論駁書と，ツヴィッカーが1658年暮れに公刊した論文，"Irenicum irenicorum, ..." をめぐるコメニウスの反駁の書が集成されたものである。キリスト教の正当性，とりわけ三位一体説の正当性に関する両者の論争は62年まで続いたが，コメニウスはこの間ほとんどツヴィッカー論駁に費やされたと言えよう。ところがこれまでのコメニウス研究にはこの部分が欠落していた。皆無ではないが，本格的な研究は見あたらない[2]。本稿でよく参照することになるビーテンホルツ（Bietenholz, Peter G.）の浩瀚な研究書，『ダニエル・ツヴィッカー』(1997)が一部これについて触れているが，その表題にあるように，それはツヴィッカー研

平成20年12月15日受理

* 建築工学科・教授

1) 本稿最後に挙げた文献一覧のCmn_IVを参照。その他の文献についてもこの文献一欄の略号と頁数を以て引用・参照箇所を示すことにした。なおツヴィッカーの原典は入手困難で，今回はコメニウスのシャーデル編の『選集』を利用した。

2) Wilhelmus Roodはすでに1970年に "Comenius and the Low Countries" でコメニウスのこれらの論考に言及している（p. 166）。その内容についても，一部とはいえ言及されている。またターンブルもコメニウスの一連の論駁書に触れている（Turnbl, 382；但しその最後の論争文書である "Admonitio tertia" などには触れていないが）。ところが不思議なことにその論争相手のツヴィッカーが登場していない。いずれにせよ，その存在が知られていながらコメニウス研究者に等閑に付されてきたことになる。現に，堀内守，相馬伸一の研究書（最後の文献一覧を参照されたい）には，その年譜にさえこれらの論駁書が欠落している。コメニウスの神学に焦点を当てたグロスマン（Großmann, Klaus）の論文，"Comenius der Theologe"（2007, Schorndorf）ですらその存在さえ言及されていないし，巻末の年譜（p. 129）にはこの期間のコメニウスの活動すら載っていない。

究書であって，コメニウスのそれではない。

さて，上述したように 1658 年以降 5 年ほど，コメニウスはこの論争に明け暮れていたと考えられるが，それは彼がここで書き続けた頁数に端的に示されている。総頁数は 1,180 頁にも及ぶのである。にもかかわらずほとんどのコメニウス研究書の年譜にはこの間の経緯が欠落している。コメニウスの思想，わけても教育思想にはそのキリスト教理解が欠かせないにも関わらず，それを避けてきたことになる。

60 年以上も前にターンブルが，コメニウスのツヴィッカーまたはソッツィーニ派に対する一連の論駁書の存在を指摘しながら，これについていまだに本格的に研究されていないことは，まさしく由々しき事態と言わなければならない。というのもコメニウスの『大教授学』にすらおびただしい数の聖書引用があり，その神学的な立場がいかなるものかを把握しない限り，その意義を正当に解釈することはできないからである。

本稿は，次の稿で（その 2 —— コメニウスのソッツィーニ派批判；その 3 —— コメニウスの「自然神学」について）で検討することになるが，その背景について輪郭を明確にしておくことを目的としている。

第 1 章　生い立ち

1.1　ダンツィヒとツヴィッカー

ダンツィヒの生まれた年は 1621 年とする説もある（Fix, 128）が，1612 年とするのが正しいと思われる（Bhz, 1；Rood, 183）。しかし確たる証拠はない。生まれた場所は Danzig であるが，その前年にツヴィッカー一家はダンツィヒ（Danzig；ポーランド語でグダニスク Gdańsk）近郊の Lichnowy（Lichtenau）からダンツィヒに移り住むことになった。父（Friedlich Zwicker）はルター派の牧師で，兄弟，親族もルター派に属していた。

彼はダンツィヒで育ち，ギムナージウムで 1620 年代後半学び，卒業後ケーニヒスベルク大学に入学し，医学を学んでいる。その後オランダのライデンで医学の学位を得ている。1639 年のことである（Bhz, 5）。その後は眼科医として生計を立てていたと考えられるが，コメニウスとの論争が行われた 1658 年以降については，コメニウスが指摘しているように（Cmn_IV, 2），医療行為は行っていなかったはずである。さもなければコメニウスに対する矢継ぎ早の応答は物理的に不可能だからである。

学位を得てからオランダ移住までのツヴィッカーの活動はほとんどわかっていない。せいぜい断片的にしかその活動を追うことはできないが，おもにビーテンホルツを参照しながら見ていこう。

ダンツィヒといえば，ハンザ同盟の商業都市として栄え，ポーランド内陸のさまざまな産物は大河ヴィスラ川経由でダンツィヒから欧州各地に輸出されるだけでなく，西側からさまざまな商品や文物のみならず，諸々の思想や宗教観がほとんど直接的にダンツィヒに輸入されたわけである（Bogdan, 11, Mokrz, 183）。ダンツィヒ東隣の低地は海抜ゼロ前後の地帯で，埋め立て・干拓の先進国であるオランダからの移民がその技術を活かすべく，この地方に住みついたことも看過できない。というのもこの定住を通して，再洗礼派の流れをくむメノー派の人々が直接・間接的にその周辺地域の住民に文化的・宗教的な影響力を及ぼしたからである（Bhz, p. 1 f.）。単なる湿地帯を耕地に変えるその技術のために，彼らは平和主義を標榜するてまえ，兵役拒否をしても，国外追放などの処分を受けることはなかった（Kot, 146 f.）。

再洗礼派（Anabaptistes）とはもともと幼児洗礼を，つまりまだキリスト者になることを決意することには未熟な判断力しかない持たない幼児が洗礼されることを拒否することに，その言い分を前面に押し出すが，このような消極的な側面を超えて，再洗礼派は自発的な信仰告白の必要性を積極的に主張する。ダンツィヒにお

いてこの宗派は平和主義を掲げ，外敵襲来で強要された徴兵を拒否することもあった（Asch, p. 10 ; Kot, p. 147 ff.）。その一部はソッツィーニの考え方に接近し，また三位一体の反対論に組みするようになった。

ダンツィヒに住むツヴィッカーにも再洗礼派の流れをくむ宗派が影響を及ぼすようになる。具体的には Ehrenpreis というモラヴィア同胞教団[3] の指導者とツヴィッカーが交流することで，彼はその考え方に近づくことになった。この指導者はソッツィーニ派と結束をもくろみ，自分たちの居所を探ることになる。

最後に，若きツヴィッカーに直接影響を及ぼしたと考えられる出来事を付記しておく。それはダンツィヒで 1631 年から始まった，ソッツィーニ派のシュテークマン（Stegmann, Joahim）とルター派のボートザック（Botsack）との，いわば “公開討論会” が 43 年まで続けられたことである（Mokrz, 184 f.）。この討論会について若きツヴィッカーが無関心であったとは考えられない。

1.2　30 年戦争とツヴィッカー

アッシュによると（Asch, 48），コメニウスの故郷，チェコでは 1600 年時点ではカトリックの住民は少数で，ほとんどが新教系であった。1600 年頃までにボヘミアの全領土のうち 5% だけしかカトリックの支配が及んでおらず，モラヴィアでも 18% に過ぎなかった。

1618 年，ボヘミアの新教徒による反乱に始まる 30 年戦争はコメニウスの亡命や流浪を強いただけではない。ダンツィヒにいたツヴィッカー周辺にもその影響力は小さくなかった。

戦争勃発後すぐにカトリック側が巻き返しに出る。神聖ローマ皇帝，フェルディナント II 世はカトリック政策を採る。ポーランド王，ジグモント III 世（在位 1587–1632），そしてこの王の死後王位に就いた Ladislas IV（在位 1632–1648）も然りである。しかしこれらのポーランド王たちはより温和な宗教政策を採用している。

30 戦争勃発後 8 年ほど過ぎると，ハプスブルク家の神聖ローマ皇帝側が優位に立つようになる。1627 年ボヘミアに新教徒追放の勅令が出され，カトリックに改宗しない者は追放処分にされることになった。翌 28 年，コメニウスはチェコを後にして，ポーランドのレシュノにその同胞教団とともに移り住むことになる。

カトリック側からの圧力に対して原則を曲げない宗派は国外に退去しなければならない状況に陥る。その典型が再洗礼派の流れをくむスロバキアのフッター派同胞教団（Hutterite Brethren）である。ツヴィッカーはこの宗派の考え方や生き方に共感を示し，その指導者（Vorsteher）である Ehrenpreis と手紙を交わすことになる（Kot, 157）。また彼は 1654 年にこの派の拠点であるスロバキアの Sobotište を訪れてすらいる（Bhz, 24 ; Fix, 129）。フッター派はポーランドに理解者を求めて，メノー派やソッツィーニ派に接触をするが，このような経緯の中でツヴィッカーはこの宗派とつきあうことになった。但しこの宗派が抱いているキリストの神性と人間性という二重の性格についてはツヴィッカーは賛意を示すことはなかった（Bhz, 25）。

第 2 章　アムステルダム移住までの経緯

2.1　ポーランドの宗教勢力図

16 世紀から 17 世紀半ばまでポーランド王国

3)　ビーテンホルツによると（p. 23），ツヴィッカーはフッター派集団をモラヴィア同胞教団と見なしていたとされる。この教団がコメニウスが属していた同胞教団と同じものかどうか不明である。そもそもコメニウスの教団がどのような流れをくむ宗派だったのかはよく知られていないが，共産主義的とも言える共同体だったことを考慮すれば（堀内，19 f.），ツヴィッカーの上の同一視もあながち誤りではなかったであろう。しかしこれが真実とすれば，つまりこの教団が再洗礼派の一派だったとすれば，オランダでの受け入れの是非が問題となるはずである。

はヨーロッパでも大国で，その支配地域は現在のリトアニア，ベラルーシ，ウクライナにまで及んだ。宗教改革前まではローマ教会とギリシャ正教会が勢力の上で拮抗していた（Jobert, 15）。東方への勢力拡大につれて首都がクラクフから，17世紀初頭にワルシャワに移っている。宗教改革後はルター派，カルヴァン派が西から，また南から勢力を延ばし始め，宗教勢力図が錯綜してくる。しかしヨーロッパ各地で頻発した宗教戦争はポーランドでは稀であった。或る宗派に属しているために迫害されたり，追放処分を受けることがなかったことになる。ジョベールによれば，他国で危険視された三位一体反対を標榜する宗派（antitrinitaires）ですら，1658年まではポーランド国内に安住の地を求めることができた（Jobert, 11 f.）。

ジョベールは16世紀後半から30年戦争終結の年である1648年までの諸宗派の学校の創設や廃校で，その盛衰を地図で示している（Jobert, 242 ff.）。1600年以前は新教派の学校が主流で，旧教派のそれは散在しているに過ぎない。ダンツィヒにはルター派の学校があった。エルビングも同様である。トルニにはジェズイットとルター派の学校があった。ポーランド同胞教団の学校はポーランドの東部やウクライナに5校ほどあったが，すべて17世紀以前に消滅している。ポーランド西部ではクラクフ付近に3校，ポズナニ付近にも1校あったが，クラクフ付近（Luslawice）の学校だけが残った。東部ではヴィルナの南に位置する町（Iwie）に1校あり，ルブリン付近に3校あったが，ルブリン付近の1校だけが残ったに過ぎない。この宗派が17世紀に入る前に既に迫害されていたことがわかる。コメニウスが育てられたボヘミア同胞教団は，ポーランドの西部，今日のドイツ国境付近に4校あった。そのうちの一つが，周知のようにレシュノ（Leszno）にあり，コメニウスがチェコから追われて，オランダに移住する前は長くこのレシュノを活動拠点にした[4]。

17世紀にはいると，目立って旧教派の学校が，とりわけジェズイットの学校が林立するようになる。それは前世紀後半からポーランド各地に，ローマ教会が，あるいはジェズイットがカトリック勢力挽回のため，人的・物的支援を注いだ成果と見ることができる。その経緯をジョベールは一章を割いてつぶさに記している（Jobert, 241-270）。ポーランドの主要都市，クラクフ，ワルシャワ，ポズナニ，ヴィルナ（現在はリトアニアのヴィリニュス）そしてダンツィヒ―これら都市に聖職者が少なからず送り込まれ，教会，学校が新設・再興された。

一方，新教派のルター派とカルヴァン派の学校の盛衰を，またジョベールの地図で追っていくと，ルター派はドイツ国境付近で学校が増えているが，その以東では皆無で，これは前世紀から変化がない。カルヴァン派ではポーランド南部で幾分学校が増えたのみで，さほど前世紀から増勢したとは言えない。

ボヘミア同胞教団の学校は，ポーランド西部にあった4校のうち3校が閉鎖され，レシュノだけが残った。このことは当時この同胞教団がどのような位置づけにあったかを示唆している。ポーランド同胞教団は1604年にラコーに新たに学校などの施設を新設したが，1638年に閉鎖を余儀なくされている。ポーランド東部ではルブリン付近に存続していた1校の他に，その東方に（キエフ以西）5校新設されたが，6校全部が1648年までに消滅している。

ポーランド全体としてはこの100年の間にカトリックが勢力を増長し，ルター派，カルヴァ

4）　モラヴィア同胞教団に限らず，ポーランド同胞教団や再洗礼派の本拠地はほとんどが辺境の地にあったことに，しかもごく小さな町であったことに注意されたい。レシュノはその典型である。また再洗礼派に見られるように，その信者たちの多くが亡命先でも生き延びていくのできる階層，つまり技術者，職工として一定の土地にしがみつく必要のない階層から成っていたのである。フッター派はもともと帽子職人などから成っていた。宗教的迫害が強まればこのような傾向は一層強まったと考えられる。

ン派は横ばい，であったが，二つの同胞教団は辺境に追いやられる形となった。特にソッツィーニ派と合流することになったポーランド同胞教団は全滅に近い状態となった。

ポーランド王，ジグモントIII世（在位1587-1632）はハプスブルク家のオーストリアと関係を深め，神聖ローマ帝国と友好関係にあった。彼自身熱心なカトリック信者であり，イエズス会師を重用するなど，カトリック化を推進したが，狂信的な宗教政策を採ったわけではない（Halecki, 139）。30年戦争の最中とはいえ，ポーランドは比較的平和で，宗教的にも寛容であった。次の王のLadislas IVもカトリックであったが，1645年にトルニ（Toruń）でキリスト教会諸宗派の融和を目指す集会（Colloquium Charitativum）を主催するほど，宗教的な対立を避けようとした（Halecki, 150）。この集会にはカトリック，プロテスタント諸派だけでなく，ソッツィーニ派も参画している（Bhz, 15）。ここにはコメニウスの姿もあった（Neval, 5）。

この集会をこのポーランド王が諸宗派に呼びかけたのは1644年のことである。この呼びかけに諸宗派，ローマ教皇庁のさまざまな思惑が交錯し，その開催が遅れることになった。新教派はポーランド東部のオルラで会合を開き，善後策を検討することになった。この会合にコメニウスも招かれているが，スウェーデンに行くことになっていたので，オルラには行っていない（Rood, 81 f.）。

この王のもとでマーグニー（Magni）というカトリックの重鎮がポーランドで新教徒をカトリックに改宗させるキャンペーンを展開する。しかし力ずくで相手を説き伏せるようなことはしなかったとされる（Jobert, 378）。彼はニグリヌスというもともと新教派の聖職者をカトリックに改宗させていており，ニグリヌス自身はこの王国の枢密顧問官という要職に就いている（Scholder, 18 ; Bhz, 7）。

このマーグニーはこの集会が開催される前後にカトリック側の論客として，討論を主導している。実はコメニウスもこの討論に偽名を使って参画しており，ダンツィヒで二つの論文をものしている（Scholder, 20）。ツヴィッカーの書籍目録にこれらの論文とマーグニーの著作が載っていることから（Bhz, 8），この時期の動向に彼自身関わっていたことが考えられる。

上述したトルニでの集会は結局のところ諸宗派の和平が成立するどころか，対立が鮮明になった。コメニウスは当時彼の庇護者であったデ・ヘール（De Geer）家のもとで教授学関連の仕事をしていた。従ってトルニでの会合参加には反対されていたわけだが，両者の間に妥協が成立して，コメニウスはトルニに行くことになった（Rood, 83）。彼はルター派とカルヴァン派との和解について仲介役を勝手出たが，結果は失敗に終わった（Rood, 83 f.）。コメニウスは最終日を待たずにトルニを離れ，1645年9月にレシュノに帰っている[5]。

30年戦争終結後，ポーランドは「大洪水時代」（deluge）という波乱の時期を迎える。東ではコサックが反乱を起こし，1655年には北からはスウェーデンが休戦協定を破棄して攻め込んできた。56年にコメニウスのいたレシュノが焼かれ，彼はオランダへの逃亡を決意する。ツヴィッカーは，フィックスによると，55年にダンツィヒに戻り，当地のソッツィーニ派とフッター派とを和解させようとしているが，ソッツィーニ派と対立し，57年に彼もオランダに移住することになった（Fix, 129）。

2.2　ポーランドのソッツィーニ派

ソッツィーニ（Sozzini ; ラテン名Faustus Socius）は1539年にイタリアのトスカナ地方，

5）ジョベールによれば（Jobert, 391），コメニウスはボヘミア同胞教団の代表として，ルター派との関係を断ち切らないようにして，カルヴァン派に近づく試みをしている。このようなコメニウスの取組は，彼の宗教的な立場を垣間見せてくれる。ところが彼の立場はさほど単純ではない。これについては脚注の7）を参照されたい。

フィレンツェで生まれ，35歳で神学研究に没頭し，やがて比較的言論の自由が保証されているバーゼルに身を落ち着かせる。1579年にポーランドに移り住むことになるが，それはポーランド同胞教団に受け入れられたためである(Jobert, 213)。しかしその思想が異端的とされ，彼は居所を次々変えている。1588年から10年間クラクフ(Kraków)で生活しているが，この10年目に暴徒化した学生たちから襲撃を受けるという事件に遭遇した。しかし周囲の人々から庇護を受けて，彼自身この事件で人物が大きくなったとされる（Jobert, 214)。

さてこの教団は再洗礼派の流れをくむ宗派であったが，ソッツィーニがこの教団を主導する以前から三位一体説を否認する動きがあった。つまり彼が受け入れられるだけの素地があったわけである（Fix, 135)。ソッツィーニがこの宗派に加わるには，当然再洗礼が要求される。しかし彼はこれを断っている。にもかかわらず彼のこの教団内での権威は高まるばかりであった。この教団の集会(synod)決議でソッツィーニがラコー（Raków）で討論と講演を行うことになった。彼はまもなく亡くなるが(1604年)，これをもとに全ヨーロッパに流布される「ラコー教理問答書」(catechism）ができたのである(Jobert, 215)。まさしくこの教理問答書こそコメニウスが1660年前後にまさしく危険なものとして告発したものである。

ポーランドの南部に位置する小さな町，ラコーはソッツィーニ派の拠点となり，いわば「聖地」としてその考えに共鳴した信奉者が巡礼する町となった。信奉者からの経済的な援助により，学校が作られ印刷所もでき，この教理問答書などが印刷され，それがほぼ欧州全土に頒布された。コット（Kot, 131 f.）によると，この町にソッツィーニ派の学校と印刷所が設立されたのは1600年頃で，ラテン語，ドイツ語，ポーランド語，オランダ語による書物を通してこのラコーからソッツィーニ派の主義・主張が欧州各地に発信されたことになる。1601年にこの会派の集会(synod)が開かれ，欧州各地から信奉者が，特に知識階層が参加している。

しかし1638年このラコーの施設，つまり教会，学校そして印刷所は閉鎖されることになった(Tazbir, 9 ; Kot, 167)。神聖ローマ皇帝，フェルディナントII世が，30年戦争で巻き返しに成功したことで，1628年に帝国内の公認宗派をカトリックとしたことに始まり，ソッツィーニ派を異端として迫害する傾向が強まったからである。

ラコーの教理問答書によると，ソッツィーニ派は原罪の思想を否定する。アダムが犯した罪は一回きりのものであって，その人格すべてが罪を負っているわけではない。いわんやその子孫である我々はこのような非道特性を帯びているわけではない，というわけである（Jobert, 229)。これだけでもカトリックのみならずルター派，カルヴァン派にも見過ごすことのできない教説であるが，三位一体説反対論をソッツィーニ派が聖書を典拠にして唱えるとき，つまりキリストの神性が否定されるとき（Scholder, 51 f.)，ソッツィーニ派は異端の烙印を押されることになる。アリウスがアタナシウスにより異端とされた，あのニカイヤ宗教会議が再現されたかのようである。上で述べた集会(Colloquium Charitativum）の後，融和が成立するどころかポーランドのルブリンで，またダンツィヒで激しい論争がソッツィーニ派とルター派等のプロテスタントとの間で行われている（Bhz, 15)。

ツヴィッカーがソッツィーニ主義を信奉するようになったのは1642年ごろとされているが(Bhz, 16)，彼もやがて論争に巻き込まれるようになり，ダンツィヒを追われることになる。ダンツィヒを追われても，時々戻ることができたようであるが，やがてオランダに移住することになった。オランダでもダンツィヒのルター派攻撃を止めることはなかったほど，ルター派に対する敵対心はおさまることはなかった。このオランダから彼のかの論争の書物，“Irenicum

irenicorum” がダンツィヒにいる兄のもとへ送られたのは 1659 年のことであった（Bhz, 17）。

なおこの年にラコーのカテキズムがオランダ語に訳されている。

2.3　ツヴィッカーとヴォルツォーヘン

ソッツィーニ主義を標榜するようになったポーランド同胞教団の間では，再洗礼派から受け継いだ平和主義，非暴力主義をどの程度容認するか，また公務に就くことの是非について論議されるようになった。ソッツィーニ自身によると，またラコーのカテキズムでも，二つの主義は厳格ではなかった（Jobert, 217 ff.）。

オランダ移住前にツヴィッカーがソッツィーニ派の人々と交流していたことは疑いのないことであるが，どのようなやりとりを彼らとの間で行われていたかは明確ではない。そこで交流のあった有力なソッツィーニ派の何人かを取り上げて，ツヴィッカーが彼らから受け取ったもの，学んだものを推測することにする。ツヴィッカーに影響を与えたと考えられる人物は，ルアール（Ruar），シュテークマン（Stegmann）など少なくない。ただここではコメニウスとも親交があったヴォルツォーヘンを取り上げてみる。

ヴォルツォーヘン（Wolzogen, Johann Ludvig）は（彼はオーストリア出身の男爵であるから，ヴォルツォーゲンと表記するのが適切かもしれない），神学と数学を学び，やがてポーランドのソッツィーニ派に加わる。コットはこの派内での一連の論争，つまりヴォルツォーヘンと Szlichtyng との論争を紹介している。前者は徹底して平和主義，此岸的な善の蔑視，清貧主義を唱える。後者は現実路線を主張する（Kot, 172 ff.）。

このヴォルツォーヘンはほとんどダンツィヒで活動していたことから，ツヴィッカーもその言動に触れる機会が少なくなかったことが予想できる。すでに彼自身ソッツィーニ主義を標榜していたからである。またヴォルツォーヘンがコメニウスと浅からぬ交流をしていたことも見逃せない。彼自身レシュノにいたコメニウスを 1638 年に訪れている公算が大きいとターンブルは指摘している（Turnbl, 345）。

第 3 章　コメニウスとの出会い

3.1　アムステルダムと Zwicker

Zwicker がアムステルダムに移住してきたのは 1657 年のことである（Bhz, 28）。もともとダンツィヒはアムステルダムと文化的にも経済的にも結びつきがあり，かつてこの都市に住んだこともあることから，Zwicker がアムステルダムを移住の地として選んだのは当然の成り行きだったのかもしれない。

当時のオランダは 30 年戦争終結後の平和な時期にあたり，まさしく絶頂期にあったといって差し支えないだろう。1568 年に始まるスペインとの戦争（1648 年まで断続的に戦いがなされたので，「80 年戦争」とも呼ばれる）でオランダは実質的にすでにスペインのハプスブルグ家の支配から脱していたのであるが，ウェストファリア条約で名実ともに独立を勝ち取ると，オランダは世界史の表舞台に踊り出ることになった。貿易で富を築いた商人たちが，対スペイン戦争や 30 年戦争で指揮をとったオレンジ公に取って代わり，主導権を握っていた。

1656 年にスピノザが，またそれ以前にデカルトがこのアムステルダムまたはその周辺に住み着いていたのであるが，ツヴィッカーの経歴に彼らの思想が足跡を残したとは考えられない，とビーテンホルツは指摘している。実際にツヴィッカーの書籍目録の中にスピノザやデカルトの書物が載っていないからである（Bhz, 29）。

さてその当時のアムステルダムにおいて，キリスト教の勢力図はどのようになっていたのであろうか。カルヴァン派が大半を占めていたと思われるが，カトリックも全体の 3 分の 1 ほどの勢力を持っていたようである。しかし様々な小集団の宗派が林立していたことも事実であ

る。ゴマリスト，コレジアント，レモンストラントと呼ばれるような宗派がそれである。フィックスはツヴィッカーをコレジアントに数えている(Fix, 128)[6]。フィックスによれば，実際のところツヴィッカーの見解が 1660 年代以降コレジアントのサークルで展開されただけでなく，彼はこの派の精神主義的キリスト者であるエントフェルダー（Entfelder）の考え方を取り込んでいたからである。つまり，当時の既存の教会（established churches）が堕落を後押ししていると断罪し，「見える教会（visible churches）」すべてを否定する，といったかなり急進的な見方に，ツヴィッカーは共鳴したことになる（Fix, 84, 129)。ただし彼はこの宗派のすべてに同調したわけではない。たとえばこの派が許容する自由な予言をツヴィッカーは認めていない。しかしこのような意見の食い違いはあったものの，ツヴィッカーの言動が制限されたわけではなかった（Fix, 129)。

3.2 “Irenicum” をめぐって

Irenicum とは平和を意味するギリシャ語 *ειρηνη* から派生した形容詞 *ειρηνικον* のラテン語形である。コメニウスは Irenica すなわち pacificatoria consilia としているが，その意味内容は分裂したキリストの諸宗派を平和的に調停することを目的にした提言書といったものである(Cmn_IV, 148)。すると Irenicum irenicorum は「和平案の中の和平案」ぐらいに訳すことができよう。コメニウスはこの和平案がキリスト教界に和平どころか混乱と対立をもたらす，という趣旨で反駁書を書いたことになる。

コメニウスは論争に至るまでの経緯を次のように記している：

> 「この Zwicker はベルギーで私と時折交友関係を持ったが，このときは Socinus 主義を隠し，亡命仲間を名乗り，キリスト者たちを調停するといった，それらしい見せかけで，私の信仰を試し，ついで（...）全てのキリスト者を，本を公刊して攻撃した。」(IV-2, 824 f. ; Iterato, p. 4 f.)

このコメニウスの言い分は額面通り受け取るわけにはいかないところがある。すでにかの書物 “Irenicum irenicorum” が発刊される前に，ツヴィッカー自身が，その時病床にあったコメニウスにその原稿を読み聞かせていたからである（Bhz, 80 f.)。

1662 年 5 月にコメニウスは手紙でユトレヒト大学の神学者ヴォエティウス（Voetius）らにツヴィッカーの言動を取り締まるように嘆願している（Cmn_IV, 1291 ff.)。ヴォエティウスは厳格なカルヴィニストで，オランダ宗教界で或る宗派の是非を左右するだけの位置にあった。コメニウスはその嘆願がこの Voetius らによって受け入れられるだろう，という期待のもとに手紙を送ったはずである。

コメニウスの意向が伝わった形跡はないが，オランダの宗教監督庁（kerkeraad）はツヴィッカーの “Irenicum Irenicorum” を次第に危険視するようになった。しかしそれ以上にこの監督庁がより深刻な事態とみなしたのは，ソッツィーニ派の注釈がついてドイツ語版聖書訳が出版されようとしていたことである。この訳業にツヴィッカーも一部ではあれ，関わっていたはずと，ビーテンホルツは指摘している。コメニウスもこのことを見抜いていた（Bhz, 35 f., 294)。

宗教監督庁は訳の写しをライデン大学の神学

6) フィックスは奇妙なことにツヴィッカーのラテン語の原著，“Irenicum irenicorum” の発刊年を記していない。そのオランダ語訳出版の年，つまりツヴィッカー本人が死んだ年である 1678 年しか記していないからである。オランダ語訳の表題は『平和の書のなかの平和の書』(Vredeschrift der vredeschriften)である。なおついでに言うならば，フィックスはコメニウスさえもコレジアントと位置付けている。しかしコメニウスは既存の教会すべてを否定または批判するわけではないので，また極端な精神主義に閉じこもるような主張はしていないので，このような位置づけは無理があろう。

部に送り，印刷の可否について裁断を仰いだ。神学部からは発禁を勧告したが，これが実力行使された形跡は無い。実際にこのドイツ語版新約聖書が売りに出されたからである。その題名は，『新約聖書／ギリシャ語から忠実にドイツ語に翻訳された』となっている（Bhz, 36, 294）。この訳を行い編集したフェルビンガーと出版元がどのような処分を受けたかは定かではないが，おそらくはまったく処分されなかったか，されたとしても軽いものだったと思われる。というのもツヴィッカー自身のかの論争書 'Irenicum irenicorum' すら，検閲を受けて，それ以降の増刷は禁じられたと思われるが，焚書のような処置はなされなかったからである。彼自身も拘束されたりしたのではなく，せいぜい警告処分が出されたぐらいだろう。なにしろ，この論争書は匿名で出されたが，コメニウスの反駁に対して矢継ぎ早にしかもすぐに出版された 2 冊の論駁書にはすでに著者名を明記していたにもかかわらず，最初の論争書の著者の特定がなされたのが 1662 年 11 月であったのだから。つまりかの論駁書が出版された後に，したがって実名が公表された後に，である。査察官がラテン語が読めないとか，そもそもソッツィーニ派の何たるかをわきまえていなかった，といった事情があったようだが（Bhz, 38），宗教監督庁がしかるべき情報を査察側に伝えておけば，ツヴィッカーは追放処分になっていたかもしれない。コメニウスはツヴィッカーを羊が囲われ保護されている柵の中に侵入してくる「狼」に喩えているが（Cmn_IV, 1292），宗教監督庁も市当局もツヴィッカーをこのような狼のような危険人物と捉えていなかったことになる。

最後にコメニウスとツヴィッカーとの対決について見ておこう。具体的な両者の論争内容は次の稿に譲るとして，その概要だけをまとめておく必要がある。

ツヴィッカーはいかなる特定の宗派にも属していないことをかの論争の書 'Irenicum irenicorum' で表明しているが (Cmn_IV, 295)，コメニウスは一貫して彼をソッツィーニ派の烙印を押しつける。ツヴィッカーはなるほどこの派の主義主張を（全面的ではないにしても）受け入れているものの，キリスト教世界の統一を提案している以上，この派にだけ肩入れするわけにはいかない。それにしてもコメニウスはオランダ移住前も移住後もソッツィーニ派と交流しているので，突然それに対して論争の書を突きつけたというのは理解に苦しむ。この点も次稿で詳細に検討するとして，オランダで当時ソッツィーニ派がどのように処遇されていたかを見てみよう。

ポーランドのソッツィーニ派の拠点であるクラクフ，ルブリン，ラコーが次々と迫害を受けて，その教会や学校，印刷所が閉鎖されると，この派の人々（「ポーランド同胞教団」と呼ばれることがある）が安住の地として移動したのが主にオランダである。同調者または理解者を求めて彼らが行き着いた先がオランダ，ということになる。コメニウスですら同じく同調者または理解者を求めて各地を旅していた。

フィックスによると，コレギアントと呼ばれる宗派がソッツィーニ派を拒むことはなかったとされる（Fix, 144）。ツヴィッカーもこの派の集まりに参画していた。「見える教会」の，つまり既存の教会の存在を否定するこの宗派はいわば「来るものは拒まず」といった構えで，他宗派の人々も受け入れたわけである。フィックスはコレギアント派の人々が，特に指導的立場の人たちがソッツィーニ派の考え方に染まっていく経緯を記している（Fix, 144 f.）。

このような経緯の中でツヴィッカーは三位一体説の過ちを，あるいはキリストは父鳴神と同一ではない，という説を，論理的にだけでなく，ニカイア宗教会議以前の教父たちの説をもとに，「反駁不可能な (irrefutabilis)」証明として 1659 年暮れに提起したのである。

オランダの当局がますますソッツィーニ派またはアリウス主義者を危険視する中で，コメニウスはすぐにこれに応じ反駁書をものした。

その後の経過については次の稿で改めて論じることにする。

おわりに

本稿では幾分詳しくソッツィーニ派の動向やツヴィッカーのこの派に対する態度などに焦点を合わせて論じてきた。それは次の稿でコメニウスがソッツィーニ派の見方をどのように，どのような立場で見ているかを確定するためである。また実際コメニウスがソッツィーニ派の有力メンバーと交流していたことが明らかになってきたからでもある。ビーテンホルツはコメニウスとヴォルツォーヘンとのつきあいについて言及しているが，これ以上の記述は見当たらない。ところが我々は Bečová や Kot を通じて，コメニウスが盛んにソッツィーニ派の人々と私的な領域にまで交流していたことを知るにいたった。しかもツヴィッカーとの論争の渦中においてもである。

ツヴィッカーと友好的な関係を直前まで保っていたコメニウスが突然ツヴィッカーとソッツィーニ派とを攻撃・批判するようになったのか全く謎のままであるが，Bečová などの論考を研究することでこの謎が解けるかもしれない。目下のところ，ひとつだけ有力な仮説と思われるものが浮かび上がる。それは，それまでいわば “全方位外交” を採用していたが，つまりあらゆるキリスト教会に呼びかけてどの宗派にも許容可能な教義と体制を確立しようとしてきたが，ソッツィーニ派のような異端は排斥しなければ，コメニウス自身，あるいはコメニウスの同胞教団が破滅しかねないような事態が突如巡ってきた，という仮説である。コメニウスは 1659 年前後に自分がソッツィーニ派と交流していた事実を払拭しようとした可能性があるわけである[7]。それはツヴィッカーに対する一連の論争の中で使われる，しかも頻出する間投詞に表現されていると考えられる。この点も次の稿で詳しく検討することにする。

コメニウスとその同胞教団は故国からの追放という境遇の中で庇護される必要があった。この同胞教団の指導者でもあったコメニウスは，この教団の主義や宗教的な信条を明示しないで，落ち着く先を探っていたと考えられる。例えば，デ・ヘール家の庇護のもと，またスウェーデンの宰相オクセンシェルナと女王クリスティーナの援助を得て教育関連の著作に取りかかっているとき，上述のトルニでの集会に参加したことだけでなく，この集会の登録者としてコメニウスがカルヴァン派の名簿一覧に載っていたことが問題あり，とされた (1646 年)。さらに彼の「汎知学」(Pansophia) と教授学もカルヴァン主義へ人々を誘い込む恐れあり，当地の神学者に嫌疑をかけられている (Rood, 89)。スウェーデンはルター主義を掲げていたのである。

このあたりにコメニウスはヴォルツォーヘンと深いつきあいをしている。このヴォルツォーヘンはダンツィヒで長く暮らしたソッツィーニ派の主要メンバーであった。しかもこの世的な善，平和をも容認しない最左翼に位置していた (Kot, 174)。そして彼はコメニウスのいわば秘書役を 1640 年代に担っていた。

既に述べたように，ツヴィッカーの生まれ育ったダンツィヒは商業都市であり，いわば “貿易立市” である。オランダは当時文字通り貿易立国であった。この両者には共通点が見出される。つまり宗教的な寛容の精神である。宗派の違いで商機を逸するようなことは可能な限り避けたい，という思潮が自ずとそこには醸成される。このような空気のもとでツヴィッカーが成長し，自らの思想を形成していったことは想像に難くない。商人は国家間の紛争を特に忌み

7) Cf. Bhz, 81. ビーテンホルツは，ツヴィッカーが ‘Irenicum irenicorum’ を公刊する前に学識ある神学者に意見を聴取していて，その中にコメニウスも入っていた，と指摘する。この時点でコメニウスはツヴィッカー一味と思われたくなかったわけである。

嫌う。商取引が制限されるからである。海外に商品を売って生計を立てている技術者，職人についても同様である。メノー派は技術者集団からなる宗派だった。再洗礼派にも同様の傾向が見られる。ここから平和思想が生まれ，キリスト教の清貧の思想，この世的な富の否定の考え方と結びついて，いわゆる私有財産を悪とする見方や国家社会における権力に対する忌避にまで先鋭化した。端的に言えば，ヴォルツォーヘンの考えがこれに相当する。

ヴォルツォーヘンの思想はモラヴィア同胞教団のそれと共鳴する部分が少なくなかったのではないか，という予想をしても，あながち的をはずれてはいないだろう。さもなければコメニウスがヴォルツォーヘンとの深いつきあいは説明できないからである。次の稿ではこの点も含めて検討することにする。

文献一覧

本文または脚注で引用，参照した文献を以下の記号で表すことにした。引用・参照する場合には，この記号とページ数のみ示した。

Asch —　Asch, Ronald G., *The Thirty Years War. The Holy Roman Empire and Europe, 1618-48*. 1997, New York.

Bečová —　Bečová, Marta, 'Zur Problematik der Comenius Beziehungen zum Sozinianismus', in : SRC（本稿の文献一覧），pp. 169-181.

Bhz —　Bietenholz, Peter G., *Daniel Zwicker 1612-1678, Peace, Tolerance and God the One and Only*. 1997, Firenze.

Blek —　Blekastad, Milada (Hrsg.), *Unbekannte Briefe des Comenius und seiner Freunden, 1641-1661*. 1976, Düsseldorf.

Bogdan —　Bogdan, Henry, *La Guerre de Trente Ans 1618-1648*. 1997, Paris.

Cmn_IV —　J.A. Comenius, *Ausgewählte Werke*, hrsg. von E. Schadel, Bd. IV, Antisozinianischen Schriften. 1983, Hildesheim/Zürich/New York.

Davies —　Davies, Norman, *Histoire de la pologne*. 1986, Paris.

Fix —　Fix, Andrew, *Prophcy and Reason. The Dutch Collegiants in the early Enlightenment*. 1991, Princeton, NJ.

Groot —　Groot, Aaart de, 'Die erste niederländische Übersetzung des Rakower Katechismus (1659)', in : SRC（本稿の文献一覧），pp. 129-137.

Halecki —　Halecki, Oscar, *A History of Poland*. 1978, London.

堀内 —　堀内　守，『コメニウスとその時代』，1984 年，玉川大学出版部。

Jobert —　Jobert, Ambroise, *De Luther à Mohila, la Pologne dans la crise de la Chrétienté 1517-1648*. 1974, Paris.

Kot —　Kot, Stanislas, *Socinianism in Poland. The social and Political Ideas of the Polish antitrinitarians in the 16th and 17th Centuries*. (Translated from Polish by Earl M. Wilbur) 1957, Boston.

Mokrz —　Mokrzecki, Lech, 'Sozinianismus in den Diskursen der Danziger Professoren im 17. und 18 Jahrhundert,' in : SRC（本稿の文献一覧），pp. 183-191.

Neval —　Neval, Daniel A., *Die Macht Gottes zum Heil : Das Bibelverständnis von J.A. Comenius in einer Zeit der Krise und des Umbruchs*. 2006, Zürich.

Rood —　Rood, Wilhelmus, *Comenius and the Low Countries*, 1970, Amsterdam.

Scholder —　Scholder, Klaus, *Ursprünge der Probleme der Bibelkritik im 17. Jahrhundert : ein Beitrag zur Entstehung der historisch-kritischen Theologie*. 1966, München.

相馬 —　相馬伸一，『教育思想とデカルト哲学』，2001 年，ミネルヴァ書房。

SRC —　Lech Szczucki (hrsg.), *Socinianism and its Role in the Culture of XVI-th to XVIII-th Centuries*, 1983, Warsaw-Łodz.

Tazbir — Tazbir, Janusz, 'Die Sozinianer in der zweiten Hälfte des 17. Jahrhundert'. in : Wrzecionko (Hrsg.), *Reformation und Frühaufklärung in Polen. Studien über den Sozinianismus und seinen Einflußauf das westeuropäische Denken im 17. Jahrhundert*. 1977, Göttingen.

Turnbl — Turnbull, *Hartlib, Dury and Comenius. Gleanings from Hartlib's Papers*. 1947, London.